

ヘブライズムとギリシア語聖書

伊藤利行

本稿は、ここ十年程の間ヘブライズムとギリシア語聖書について研究を続ける中で考えてきた問題点を整理したものである。⁽¹⁾

1 ヘブライズムへの視点

ヘブライズム Hebraism と云う言葉はヘレニズム Hellenism と云う言葉と伴に用いられることがある。ヘブライズムという言葉もヘレニズムという言葉も簡単に表現すれば「ヘブライ風」・「ギリシア風」と言つて良いのであるが、その用法は一樣ではない。広義の用法では、西洋思想の二大源流としてのヘレニズムとヘブライズムという意味で用いられる事がある。この広義のヘブライズムは、その一つの流れであるキリスト教思想を示す表現として使用されることも多い。他方、広義のヘレニズムという用語はギリシア風の思想、ギリシア流の思考法を踏襲した思想という意味で用いられる。狭義の意味では、ヘブライズムという語は言語としてのヘブライ語の用法の意味で、即ち、「ヘブライへ語法」と云う意味で用いられる事があり、ヘレニズムという語は、歴史的な特定の時代としてのヘレニズ

ム時代を指して用いられることがある。筆者が本稿でヘブライズムやヘレニズムと云う場合は、共に広義の意味で用いている。ヘブライズムは、唯一なる神にのみ仕えることを根幹として成り立つ宗教的世界観である。その起源が、初期のユダヤ教にあり、キリスト教によって継承され、イスラム教においても貫かれてきていることは、自明の事としてよいであらう。これら三つのヘブライ的宗教の全てについて考察することは筆者の能力を遙かに越えている。筆者が研究しようとしている事柄は、(1) このヘブライズムとキリスト教の関係をギリシア語聖書〔ギリシア語の旧新約聖書〕を媒介として研究する事、即ち、ギリシア語聖書自体は素より直接間接を問わずギリシア語聖書に基づいて思考したキリスト教著作家の思想の歴史的研究を行う事と(2)キリスト教を考察の中心に据えた意味でのヘブライズムそのものの組織的な思想研究を行う事とである。⁽²⁾

キリスト教の研究を続ける中で筆者が最も心深く魅せられ、それを探求し明らかにしたいと絶えず思い憧れ続けてきた事柄はヘブライズムの持つ宗教的ダイナミズムの組織的解明である。ここにヘブライズムの持つ宗教的ダイナミズムと筆者が考えるものが必ずしもヘブライズム理解という点で適切でない点もあるかもしれないが少なくともそのように筆者が考えるものがヘブライ的宗教にみられ、それが筆者を限り無く魅了し続けている根本的な関心事であり研究の緒となつていことは確かである。

る。このダイナミズムとは有為転変極まりないこの世にあって唯一の神を信じることよって現在のな様々な限界性を突破し自由を獲得していく信仰の発現を云う。おおよそ如何なる宗教的世界観であれ、その基底にあり、絶えずその事実が忘れられてならないものは、苦悩であると考えられる。苦悩する現在の姿を全く視野に入れることがなければ、如何なる宗教的世界観も成立しないであろう。ヘブライズムも、その根底にイスラエルという一つの民族の長く深い苦悩の歴史を担っており、その苦悩の歴史の中で比類なき精神性を凝縮させるに至ったのである。それゆえにヘブライズムは、絶望から希望に至る宗教性の発現形態において類いまれな大きく深い精神の躍動を現わすに至り、苦悩が深ければ深い程その真骨頂を発揮するという性質を備えるようになったのである。この宗教的躍動は、徹底的なまでに集中し極端から極端へと然もより高い次元へと動いて行くような思想的構造を持っているように見える。その思想的構造の組織的な把握について展開する事は容易ではなく、これからの課題であるが、その表現形態の幾らかを例示し多少の構造型を垣間見る事は可能であると思う。

〔1〕ヘブライズムにおける〈発端〉と〈緊張〉

ヘブライズムは宗教的世界観である。その意味で、その思想圏の発端・入口・出発点というものは、宗教的自覚の発端に等しいといえよう。宗教的自覚の出発点は、苦悩する現在に直面

ヘブライズムとギリシア語聖書

する時である。創世記第一章の言葉はその事を象徴的に示しているように読める。「はじめに神は天と地とを創造された。地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた」(1~2節)。創造開始前の世界の姿は混沌茫茫とした現実であった。ここから創造が始まる。確実な頼りうる何物もそこにはなかった。真の苦悩の現実もそれに似ている。真の苦悩にあっては、確実で拠所としうるものが一切存在しない。それがヘブライズムの出発点・発端であり、この点に立たない限りヘブライズムの世界への視点は開けない。ヘブライズムの発端が苦悩の現実にあると云う事の一つの例をヨブ記に見ることができる。財産を失い子供達を失い妻にも去られ友からも理解されない、そして自分自身でも苦悩の現実の意味を納得できないヨブ。このヨブの現実の回復は、すべての拠所としていた事柄の放棄、自らの無知の告白に始まった。拠所とすべきものが一切崩壊する時、ようやくヘブライズムの発端に立つことができるのである。この崩壊の中には、神についての何らかの形で既知の知識も含まれる。この意味においてヘブライズムの発端は、絶対的な出発点を持たない不定的な発端開かれた発端であると云える。この不定的あるいは動的な発端をヘブライズムが持っていることは、将来の新しい苦悩に対しても対処しうる力をヘブライズムが持っていることを示しているのであり、その底知れないダイナミズムの源である。この発

端が定まる時、初めて終りが定まる。ここで云う終りとは苦悩の現実が発端であることに応じた苦悩の終りである。発端が不定的あるいは動的な発端であったことと対応して、終りも不定的あるいは動的な終りであるといえる。苦悩についての理解に応じて、即ち、苦悩の理解が深ければ深いだけその苦悩からの解放についての理解も深いものになる。この初めと終りの不定的でありかつ対置的な性質が、ヘブライズムに絶えず新鮮な緊張を持たらす。世界の終りは未だ到来しておらず、苦悩の現実には深まっている。それゆえ我々がヘブライズムについて知りうる事もなお深まりゆくであろう。大切な事は発端としての苦悩の現実である。「夕となり、また朝となった。第一日である」(5節)という言葉は、ヘブライズムの発端が苦悩の現実にあることをより簡潔に象徴的に表明しているように見える。夕べが一日の始まりであり、一日の終りである。すべてヘブライ的なものは夕暮に始まる。

ヘブライズムという一般に動的な性質が特徴的であると言われるが、ヘブライズムにも静の側面が存在する。しかし、ヘブライズムにおける静とは発端と終りの緊張の中に立つ動的な静である。もしヘブライズムがこの発端を見失ったとするならば終りもなく従って緊張もないので、この動的静そのもののバランスが失われてヘブライズムはその本来のダイナミズムを完全に失った意味のないものに没落してしまふ。キリスト教には、

歴史的に見て、苦悩や迫害時にその底力を顕し、平時にはあまり力を顯さないかのような印象を持たざるを得ない点があるように思われる。それは平時にはやはりヘブライズムの発端である苦悩の現実が見落とされる点があり、その為に緊張を失い力を失ってしまうからではないだろうか。それゆえキリスト教的な倫理ということが考えられる際に、このヘブライズムにおける静の側面が注目されるべきである。なぜなら倫理とは安定したものの静的なものという側面を持っているからである。キリスト教的倫理にとって愛がしばしば中心的な事柄として論じられるが、単なる愛がキリスト教的な倫理を成立させるのではない。キリスト教的な緊張の中にある愛は、単なる愛とは異なる。ヘブライ的な発端に立つ時、激しく動的に静かな緊張の中に人は置かれる。極限の苦悩と人の思いを越えた約束された極限の自由の緊張の中にあつて初めて人は苦悩の直中にあつても平穩な日常の中にあつても等しく静かな姿としての愛という形を通じて倫理の場に出ることができるのである。「目がまだ見えず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神はご自分を愛する者たちのために備えられた」(第一コリント2・9)。

〔2〕ヘブライズムにおける〈集中〉と〈透徹〉

ヘブライ的世界観の典型的な例は、召命への応答の中に良く示されているように見える。さすらいの一アラム人であったア

ブラハムは、地のすべての者の祝福の基礎となるとの約束を受け、それを信じ続けた。ここには果ても無く遙かな隔たりがある。絶滅皆無に等しき者から満天の教え難い星の教程の多くの子孫達、荒唐から榮光へと至る極から極への飛躍である。

ヘブライズムの表現は、それが時間という場で登場する時には、その徹底性の顕われを時間の次元での最も凝縮された姿である瞬間という形を採って顕われ、それが空間という場面で登場する時には、その徹底性の顕われを空間の次元での最も凝縮された姿である空間的な一切のものが一点に集中したと同時に隅々にまで透徹しているという形、即ち全一性という姿をもって顕われる。イエスの弟子達が召された時、全てを捨てて直ちに従ったのも同じである。イエスという方は、弟子達にとって全てを捨ててこの方へと集中してなんら惜しくない、しかも出会った瞬間にその決断が出来るほどの方、弟子達の全生涯を捧げきって悔いのない方であった。その召しの瞬間は正に弟子達にとって永遠の凝縮した瞬間であり、永遠性に接した満ち満ちた時だったのである。

〔3〕ヘブライズムにおける〈見えるもの〉と〈見えないもの〉これは、祈りの中に典型的に示される。祈りは常に見えないものから見えるものへの求心的な招きとそれに対する遠心的な応答である。次のような詩篇の祈りは、ヘブライ的な祈禱の一つの典型である。「わが心のくずおれるとき、わたしは地のは

てからあなたに呼ばわれます。わたしを導いてわたしの及びがたいほどの高い岩にのぼらせてください」(詩篇61・2)。ここにも極から極へと飛躍する躍動する精神が漲っている。苦悩が極まり、それゆえに全ての既知の思いが崩壊した時、即ち、ヘブライズムの世界の発端に立った時、人は大いなる飛躍へと招かれていた。その時、人は現在の苦悩の解決を願うことではなく、そのような事を遙かに越えた極限としての及びがたいほどの高みへと向かって爆発する願いを祈る力を与えられるのである。見える世界のあらゆる苦悩の中であって、それを見つめぬる時、既知の認識を越えて、真に遙かな見えないものを望み見る渴信が人の魂の中に湧きでてくるのである。

このような思想的な特徴を最も微細な所から究明して明らかにすることが筆者の目差す所であり、その分析の場として考えているのが、ギリシア語聖書とその思想的影響下にある世界なのである。

2 ギリシア語聖書とキリスト教⁽³⁾

ギリシア語聖書とキリスト教の問題について簡単に記してみたい。聖書の問題はキリスト教にとって啓示の書物として本質的に重要な問題を含んでいるが、取り分けギリシア語聖書の問題は複雑かつ本質的な問題を含んでいる。その問題は次の互いに関連しあう二つの要素から生じているといえる。

① ギリシア語聖書（セプトゥアギンタ訳のギリシア語旧約聖書とギリシア語新約聖書）は、初期キリスト教会の聖書であり、この思想的影響下でキリスト教思想が形成展開された。

② ギリシア語聖書で示された内容は、ギリシア思想ではなくヘブライ思想であった。

簡単に言えば、ヘブライ思想がギリシア語で表現されたという事から生じる問題である。第一の点については、旧約聖書と新約聖書の二つの部分に分けて考える必要がある。ギリシア語訳旧約聖書であるセプトゥアギンタは、そのほとんどの部分がヘブライ語本文（その推定される本文はマソラ本文と完全に同一であるわけではない）からの翻訳であると考えられる点で、ヘブライ語との緊張関係を持っている。新約聖書は、パウロの書簡等のようにもともとギリシア語で書かれた部分とイェヌの言葉とその活動を何らかの形でギリシア語以外の言語で保存した部分を翻訳編集することによって成り立っていると考えられる福音書の部分とからなる。しかし、パウロ書簡等のようにオリジナルにギリシア語で書かれた部分でさえ、著者はギリシア語のみを解する人物ではなくむしろヘブライ語をその母国語として解することの出来た人物であったと考えるも良いので、ここにもヘブライ語との緊張関係がある。その意味でギリシア語聖書は、ヘブライ語との緊張関係を内包しているのである。

キリスト教会はその歴史的發展の中でこのギリシア的なもの

とヘブライ的なものとの間で興味ある展開を示してきた。その最も顕著な場は、旧約聖書であった。十六世紀の宗教改革期以降、聖書翻訳等における旧約聖書の本文としてはヘブライ語のものが用いられる事が次第に普通になり、今日でもその習慣が踏襲されている。しかし、旧約聖書の本文としてヘブライ語のものを用いることは宗教改革期の人文主義の影響によってのみ行われたのではなく何よりもヘブライズムそのものの持つ徹底性によって又キリスト教自身の中にあつたヘブライ的なものを尊重する精神とから生じたものであると考えるべきであろう。

宗教改革期以前にもその例がある。ウルガータとして知られるラテン語聖書は、そのすべてがヒエロニムス自身の改訂によるわけではないが、少なからざる部分がヘブライ語本文を用いて改訂されている。もともとウルガータはセプトゥアギンタの影響下にあるキリスト教世界で承認を得るまでには改訂後教世紀を必要としたのであるが、またキリスト教会の外の事になるがギリシア語聖書そのものもヘブライ語本文によって何種類かの改訂訳あるいは新訳がつくられ、オリゲネスのヘクサプラ(4)において比較の対象として導入されている。キリスト教の歴史の中で繰り返し現われるヘブライ的な真理性への回帰（ヒエロニムスによって *Hebraica veritas* の問題として触れられている）は、先に指摘した第二の点であるヘブライ思想が内容として伝えられているという点に起因するであろうが、キリスト教思想

の基礎がギリシア語の聖書によって形成されているという歴史的關係と照し合せる時、実に不思議な印象を与えずにはおかない。異邦人世界に宣教を進めるに至ったキリスト教界の中にヘブライ語を自由に駆使できる人物は、宣教者の側でも被宣教者の側でも極めて稀な存在に近かったと考えられる。それゆゑ聖書に記された約束がイエス・キリストにおいて成就したとして新約の時代を評擗するキリスト教会は、その本来の聖書である旧約聖書としてヘブライ語の聖書を用いることはできずギリシア語訳であるセプトゥアギンタが用いられ、その下で初期教会の思想形成がなされざるを得なかったと考えられるのである。

ギリシア語聖書は、古代教会の時代には多くの言語に翻訳される場合の底本となった。ラテン世界で用いられた古ラテン語訳聖書もギリシア語聖書が土台となっている。従って、色々な古代語の聖書翻訳の底本にセプトゥアギンタが用いられているという事をもって神学思想形成の基礎にセプトゥアギンタが存在したという判断の根拠とすると云う観点に立てば少なくとも七世紀中頃までは西方神学にとつても東方神学にとつてもその神学的基礎はギリシア語聖書にあつたと言えるのである。

ギリシア語旧約聖書がキリスト教にとつて取分け重要な点は新約聖書が旧約聖書をギリシア語で用いていることによりギリシア語旧約聖書が新約聖書の思想形成に内在的に関係していると言ふ特別の位置を占めているからである。ここにヘブライ的

思想をギリシア語で表現するという場合の本質的な問題が浮き上がってくる。即ちヘブライ語とギリシア語の關係が新約思想に内在的な要素と成つてしまつて以上、新約思想の研究にとつて単にギリシア語旧約聖書の引用を研究する事に止まらず新約聖書の一語一語の背後にあるヘブライ的な緊張關係を解明する事が必要であるという事である。それゆゑキリスト教思想の研究にとつてギリシア語聖書は本質的なものであり、キリスト教思想の形成と發展という思想史的研究の観点に立つて研究しようとする時、その出発点がセプトゥアギンタに遡るのは当然の事と言えるのである。

セプトゥアギンタについては、實際問題として旧約学者はヘブライ語本文の研究の一つの道具としてまた新約学者は聖書引証の確定の道具程度としてしか扱つていないことが多いように思われる事は大変に残念な事である。その割には、聖書翻訳でヘブライ語本文が不明解な場合にセプトゥアギンタに従つて訳されていることが多いのには驚く。セプトゥアギンタはもとより初期キリスト教会における他の言語の聖書翻訳と伝承等について研究されていない事は山積している。勿論それらの中には翻訳が比較的新しくて重要性が高くないものも含まれるが、シリア語聖書のように古くかつ極めて重要なものでさえライデンのベシッタ研究所からようやく学術的な版が出だした程度である。すべての聖書の古代訳について学術的なテキストが完成

され、その詳細な伝承系統が明らかにされるまでには道は遙かに遠いのである。⁽⁵⁾

ギリシア語聖書とキリスト教の関係は、ほぼ上記のようであるが実際問題として旧約聖書であるセプトゥアギンタの個々の文書と新約聖書や使徒教父の文書が時間的に順序良く、即ち、旧約の文書の成立後に新約の文書が出来たと言うわけではなく一部は時間的に重なりあっている。またギリシア語聖書の伝承に関しては、その活動は明白ではないにしてもルキアヌスやヘシキウスという四世紀初め頃の人物によつて旧新約の本文が校訂されていると伝えられるので、セプトゥアギンタの中に何らかのキリスト教的加筆が施されている部分もあることが想定される。さらに最近の傾向として初期のユダヤ教の活動や文書に対する研究が進んで来たので別の視野も開けてきている。それゆえ理念的な旧約と新約という区分で考えることを越えて、ギリシア語聖書とその思想世界という観点で考察することの方がより整合性の高い思想的な理解をもたらす可能性があると考えられるのである。

3 研究の経過と問題点

研究の経過と問題点を簡単に整理しておきたい。新約聖書のパウロ書簡の研究から出発した私の研究は、上記のようなギリシア語聖書についての理解に達する事によつて、セプトゥアギ

ンタやヘクサプラにおけるヘブライ語・ギリシア語の対応関係をマソラのヘブライ語本文を用いて研究し、それを介して新約思想・教父思想へと続くキリスト教思想の歴史的展開を研究すると云う構想へと発展した。

筑波大学で優れたコンピュータ利用環境の中に置かれた私はセプトゥアギンタおよびそれに関連した聖書の色々な古代語訳と云う膨大な量の資料を縦横に比較検討するという目的でコンピュータの利用を始めたが、やがてもっと本質的なヘブライ語とギリシア語との表面的ではない深い「対応」の問題にそれを利用出来ないかと考え始めるようになった。それは計算機科学の中に出てくる階層的なデータ構造の考え方が私の研究にも応用出来るのではないかと考えたからである。対応の問題は、人間の経験や意識を異なる言語で表現したり理解したりする相互的な現象を考えると云うことである以上、表面的な「語」のレベルで対応を考えていたのでは不十分である(例えば、ギリシア語の「神」を意味する *theos* がヘブライ語の *elohim* と対応するということだけでは、殆ど何も分らない)ので、「語」そのものが働く意味領域、語の意味の拡がりの中で説明する必要がある。即ち、対応の基礎になる単語が如何なる意義素を持つて機能しているかを関連語群との結びつきの中で明らかにする必要があるのである。これが語義域 *Wortfeld* (Wahrig, Deutsches Wörterbuch) に「*dem Sinne od. der Bedeu-*

tung nach zusammengehörige Wörter ともあひ)の考え方を導入した理由である。語義域はその言語が用いられる生活世界、即ち経験の総体を鮮やかに浮かび上がらせる。この一連の関連する語群は、それぞれが全く無秩序に関連しているわけではなく階層的な構造によって整理可能なものではないかと考えたのである。語義域を階層構造を用いて解明しようと考えたのである。

以上のような問題について十分な再検討の機会を与えてくれたのがイスラエルでの研究生活であった。E. Tov の CATS プロジェクトに私は参加していたが、そこでのギリシア語・ヘブライ語の対応のさせかたは完全に機械的に生成されたものではなく人の手によって補正するという方法が採られていた。即ち、対応についての完璧な理論と方法は確立されていないという事である。この点で私は失望したが、そこから少し考えを進める事ができた。対応の問題には次の二つの段階がある。①相対的な文脈の拘束から表面的にギリシア語とヘブライ語との対応を、即ち、用例からの対応をつけることまでは可能である。②用例から推定された意味の広がりだけでは理解としては不十分である。なぜなら言葉には言葉そのものとしての幅があるので用例がなくとも推定される意味の広がりの世界があるからである。この意味の広がりを理解することが重要である。語義域はこの欠落した部分を補完するのに役立つと考えられる。しか

し、用例がないのだからそれは理論的な補完という事であり、その方法として利用可能なのは自然の拘束を用いることである。この方法は全てを補完するものではない。言葉には、個人的な深さがある。そういう個的な意味・意識の世界は把握しえないことがある。

とりわけ新しく気付いた事があった。それは、これまでは「語」や「文」と言うレベルで考えていただけで、もっと大きな「物語」のようなまとまりの事を十分に考えていなかった事であった。人はある事実に基づいて、ある時は一語で、ある時は一文で、ある時は一つの物語のような長いもので、自分の意識を表明する。しかし、言葉の数が多ければ具象性が増大し言葉の数が少なければ抽象性が増大するという違いはあるにせよ表現が長くても短じかくてもそれらの表現がその背後にある事実に対する理解を一点に集約しようという意図を内に含んでいると云う点では同じである。そういう異なる表現をとりながらも一つの事実理解を示すという働き、物事を要約する方法というものが人の中には存在する。あえて解釈法と言わないのは、この「要約」と言う働きに注目したからである。物事に対する見方である何々イズムと言うものは正にこの要約法そのものである。イズムは、何んらかの組織的な見解の総体である事以上に思想的展開を成り立たせる規制的なものそのものである。何んらかの情報が入ってくるとこの要約法が一種のネットの

ようなものとして働き、情報の閉鎖や遮蔽を行うのである。この要約法の構造を解明する必要がある。その手掛りとなるのが、要約にとつての重要な機能と考えられる「否定」の局面である。なぜならば意識を一つの頂点に導くためには不要な表現や意識を整理し斬捨てなければならぬので、当然否定の局面が現われてくるからである。

対応を別の視点から見ると比較の問題に出合うことになる。比較についてはまた別の機会に詳しく考えてみたいと思つているが、コンピュータのような機械を使つて対応の作業を行う事を考えていると一つだけどうしても気になる問題がある。それはパターン化された知識・認識と脱落する個別性の問題である。恐らくこれは比較という方法が本質的に持つ克服できない弱点であると思う。単なる単語の対応比較であれば、それほど問題の深刻さは認識されないが、超越者の問題を考えてみれば明らかであろう。今なおメシア刻米を待つユダヤ教徒とイエス・キリストの再臨を待つキリスト教徒の間に類似するものは多いが、やはり異なっている。教会がキリストの再臨を待つ思想のパターンを取り出し、キリストの部分を不特定の未知教 X と置換えるなら、その場合に脱落するものがある。キリスト教会が待っているのはキリストであつて他の存在ではない。パターン分析は自然的共通的なものを分析する。それによつて落ちてくるものは特殊性個性性の部分である。解体分解できない個別

性と言う事を忘れるなら比較研究は、健全なものではなくなり、告白的な具体性を欠くと単なる論理操作に陥る。比較することは比較の内側に真に重要なものを認めるからか、それとも比較の外側に真に重要なものを認めるからなのだろうか。今の私の考えでは、少なくとも比較の外にある真に分解不可能なものを解明しようとして比較という方法は用いられるべきではないかと言わざるを得ない。

以上のようなわけでこれからの課題としては、セプトゥアギンタのコンピュータによる研究の中で方法論的に一〇〇%確実な部分（聖書のデータ作り、聖書の翻訳に関係した古代語諸語の文法解析ソフトウェアの作成、語彙分析に基づくそれら古代語の基本的な電子辞書の作成等）を統行しながら、今まで控えてきたテキスト解釈に入っていく。その際には、様々な面での「否定」の問題を取り扱うつもりである。

註

(1) 本稿は、学問的作業が遂行困難な状況の中で書き上げられた為に叙述が随筆風にならざるを得ず、『基督教学研究』に掲載して頂くに相応しいものかどうかと言う点で大変に心苦しい思いがする。学問的作業が十分に遂行できる状況が訪れ積年の研究を具体的に展開できる事が再び許される日が来ることを祈りつつ提出するものである。

(2) ヘブライズムの問題は、しばしばヘブライズムとヘレニ

ズムという問題設定として、神中心の世界観と人間中心の世界観というような類型論として対置して理解されることが多い。しかし、現実のギリシアからパレスチナを経てエジプトに至る地中海東岸の世界では、古くから様々な面での交流があり、単純な類型論は、決して軽々に用いられない。足掛け三年に渡るイスラエルでの研究生生活の中で聖書の記述の舞台となった世界を少々ではあるが具体的に足で歩いて見てみる機会を得たことが筆者にこの問題を考え直す切っ掛けを与えてくれた。従って筆者がヘブライズムを考える時、簡単に類型論的にヘレニズムと対置して考えているのではない。そのような問題はもっと基礎的な研究を必要とする。筆者がヘブライズムとギリシア語聖書を考える場合、それは飽くまで

- ①ヘブライ語による聖書本文の存在→②ヘブライ語本文のギリシア語本文への翻訳→③キリスト教の宣教と思想形成におけるギリシア語聖書の使用という歴史的な流れに則して考えているのであり、この流れの詳細な研究の過程において初めてヘレニズムと対置されるべき様々な具体的な緒も捕えらるるのではないかと考えている。
- (3) これについては、拙論「ギリシア語聖書の研究への構想」(筑波大学哲学・思想学系編『哲学・思想論集』第8号1988 pp. 15-26)でより詳しく論じた。

- (4) ヘクサプラについては、拙論「ヘクサプラ断片の残存率

ヘブライズムとギリシア語聖書

について——ヘクサプラ研究1——」(京都大学基督教学会編『基督教研究』第4号(一九八一年)一六〇—一七三頁)および「シロ・ヘクサプラとヘクサプラ研究——ヘクサプラ研究2——」(筑波大学哲学・思想学系編『哲学・思想論集』第9号(一九八四年)一—一七頁)参照。

- (5) セプトツァギンタ研究の基本的文献について簡単に紹介する。

A. 概説と文献目録 セプトツァギンタ研究についての外観的な解説をしているものとしては、各種の聖書辞典や聖書緒論類の他にケントラフナーとして、次の四つのもがある。

[1] H. B. Swete, *An Introduction to the Old Testament in Greek*, Cambridge, 1902, revised by R. R. Otley 1914. Reprint of the revised edition, New York, 1968.

[2] S. Jellicoe, *The Septuagint and Modern Study*, Oxford, 1968.

[3] N. Fernandez Marcos, *Introducción a las versiones griegas de la Biblia*, Madrid, 1979.

[4] M. Harl/G. Dorival/O. Munnich, *La Bible Grecque des Septante. Du Judaïsme Hellenistique au Christianisme Ancien*, CERF 1988.

これ以外に次の二つのものを参照すれば、セプトツァギンタ研究上の主要な文献についてはほぼ把握することが出来る。

- [5] S. P. Brock/C. T. Fritsch/S. Jellcoe, A Classified Bibliography of the Septuagint, Leiden, 1973.
- [6] IOSCS の年刊の Bulletin of the International Organization for Septuagint and Cognate Studies (BIOCS S) 1968-.
- B. テキスト セプトゥアギンタのテキストは色々あるが、普及版として次のものがある。
- [7] A. Rahlfs, Septuaginta, 2vols, Stuttgart, 1935. この版は、カリフォルニア大学ローレンス校で用いられる TLG (Thesaurus Linguae Graecae) と同じ全ギリシム語文庫をコンピュータ・データベース化するプロジェクトによって本文の部分のみ入力されているため、コンピュータを使用した様々な処理が可能となる。筆者も長年このデータベースを愛用している。
- 大型のテキストとしては、一九〇八年にゲッティンゲンで発足した Septuaginta-Unternehmen による全一六巻で完成する予定の版があげられる。
- [8] SEPTUAGINTA. Verus Testamentum Graecum Auctoritate Academiae Scientiarum Gottingensis editum
これは三五分冊くらいで出るようであり、現在二〇分冊が出ている。最近、刊行のスピードが少し早くなった(八九年と九〇年に新たに一冊ずつ刊行される予定)が、発足以来の既刊

行部分の絶対量が全セプトゥアギンタの三五%程度であるので、事業当初の偉大な準備作業の時間や二度の戦争と敗戦による様々な困難により遅れたこと等を考慮しても、入念を極めたこの仕事の今世紀中の完成はかなり困難な期待と言わなければならないであらう。

セプトゥアギンタのテキストとしては、以上の他に、次の一点を挙げておけば十分であらう。

- [9] H. B. Swete, The Old Testament in Greek according to the Septuagint, 3 Vols, Cambridge, 1887-94.
- [10] A. E. Brooke/N. McLean/H. St. J. Thackeray, The Old Testament in Greek according to the text of Codex Vaticanus, supplemented from other uncial manuscripts with a critical apparatus containing the variants of the chief ancient authorities for the text of the LXX, 3 vols. in 9 parts, Cambridge, 1904-40.
- 前者は、[11]の基礎となつてゐるのび、新しいコンホルダマンズが出現する迄は、一応の意味を持つてゐる。後者も、やはり[8]の完成するまでの間、欠損部分を埋めるための役割を果す限りの価値がある。
- C. コンホルダマンズと辞書
セプトゥアギンタのコンホルダマンズとしては、
- [11] E. Hatch-H. A. Redpath, A Concordance to the

Septuagint and the other Greek Versions of the Old Testament, Oxford, 1897, Reprint Graz, 1954. しばしば断片本がキリシムにのみ用いられる。

パルマヤンキントの辞書は、その中のいくつかは、

- [12] J. F. Schlessner, Novus Thesaurus Philologico-Criticus, sive Lexicon in LXX et reliquis interpretis graecis ac scriptores apocryphos Veteris Testamenti, 5 vols., Leipzig, 1820-21. Reprint Glasgow, 1822; London, 1829. 本辞書は、しばしば最近の版に用いられるが、原書は、その中のいくつかは、辞書に用いられる。

[13] H. G. Liddell/R. Scott/H. S. Jones et al., A Greek-English Lexicon with Supplement, Oxford, 1968.

- [14] W. Bauer, Griechisches-Deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der übrigen urchristlichen Literatur, Berlin, 1963f, 1988f. 第1版は筆者未見。辞書は、その中のいくつかは、最近の版に用いられる。
- [15] F. Rehkopf, Septuaginta-Vokabular, Göttingen 1989. この本の辞書は、Das erste vollständige griechisch-deutsche Lexikon für die Septuaginta として用いられる。パルマヤンキントの辞書は Hatch-Redpath として知られる。Bauer や Liddell-Scott の辞書類、その中新約聖書やその他の個別のギリシム類を参照しながら、大抵かな頻度と

＜ブライズムとギリシム語辞書＞

意味を示しているもので、二次的なものである。残念ながらギリシム語一語につき基本的な意味のみをドイツ語で説明するという方式なので、頻度の多い単語については意味の表示が不適切な点が見られる。しかし、このようなものでも一応セプトゥアギンタの語彙が一目でわかる語彙表が出現したことは意味がある。

辞書の問題はギリシム語の問題は IOSCS の下で将来的には解決される。インシブルニア大学とブライズム大学の画題 (CATSS) によるプロジェクトは R. Kraft により、インシブルニア版セプトゥアギンタのコンピュータ・データベース化が進められると期待され、E. Tov により Rahlfs 版セプトゥアギンタをとりあえず用いてブライズム語一ギリシム語の対応を行ったデータベースを作成し、そこからセプトゥアギンタの辞書を編集する作業が行われている。このプロジェクトの下で、それが完全な辞書とギリシム語が完成されることになる。ブライズム語一ギリシム語辞書データベースの辞書は、E. Tov, A Computerized Data Base for Septuagint Studies. The parallel aligned text of the Greek and Hebrew Bible. Journal of Northwest Semitic Languages Supplement Series No. 1, CATSS Vol. 2, Stellenbosch, 1986 参照。

(6) 勿論この目的でさえ完遂する事は大変に根氣と経費の必要とされる仕事であり、現在もその完成には至っていない。信頼できる程の底本が未だ存在しない古代語訳もあるので主本文を入力するだけでも大変な仕事である。このような仕事は歴史的に一回的に行われれば十分であるので、既に入力が完成されているもの(幾らかある)を國際的に自由に使用を認め合うようなシステムが必要であるが、未だそのような朗報を聞いた事がないのは残念である。この仕事の完成に個人的

な研究時間を用いるなら他の事ができなくなるので、ある程度の段階(即ち特に重要度の高い古代語訳の入力完成)で残念ながら中断せざるを得ないと思う。

(7) 聖書文献にコンピューターを用いることについての私見は、拙論「語義域分析と聖書釈義——聖書文献へのコンピューター利用によせて——」(『哲学・思想論集』第一〇号)一九八五年)一五—二四頁)の中で簡単に触れた。